
あの月が満ちる時

ぬじゃわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの月が満ちる時

【Nコード】

N46910

【作者名】

ぬじゃわきし

【あらすじ】

大ヒット歌手の愛飢男あい・こつえおが、政府に目をつけられた！やってきた刺客、歪飢男わめ・こつえをは愛で政府の願う曲を作れと命令を愛に下す・・・
はたして、国家の仕掛けた陰謀とは？

愛飢男あい・うえおといういかにも愛に飢えた男がいた。彼は全人類からの愛を欲し、そのためにはカリスマになればいいと思いついた。

そう。愛は歌手になろうと必死の努力をした。みんながみとめるカリスマ歌手。そのためにはどうすればいいか。どうお洒落して、どう魅せて、どう歌うか。

彼は元来あつた素質もあつて、爆発的な人気を得た。ライブはいつも満場以上、彼が現れるだけで多くの人が嬉しい悲鳴を上げた。愛は十八番の「あい・うえおの愛の歌」を歌った。

）

♪ “あ” なたがすきよ

“い” までもすきよ

“う” しろにいつまでついてくよ

“え” いえんにすきよ

“お” わりはないよ

ほんとなの？じゃあおまじない、わすれないでとなえるよ

（サビ）

あい・うえお、そうあ・い・うえおを
みんなで唱えて「あい・うえお」

あい・うえお、そうあ・い・うえおは
不滅な呪文「あい・うえお」

すべての始まり「あい・うえお」

みんなで一緒に「あ・い・う・えおー！」

）

大歓声。愛はその歓声に陶醉した。

さて、ある日。愛の家に、謎の男が訪れた。彼は言った。

「今日は…愛・飢男さん。ご尊名はかねがね…私はこう言う者です…」

男は名刺を渡した。名刺にはこう書かれていた。

「政府特務機関
わめ・うゑを
歪飢男」

愛は自分とほぼ同じ名前である事に驚きを隠せなかった。その表情を見て、瘦せた歪の顔がニヤリと笑いを浮かべた。

愛は言った。

「いったいどんな用で…」

歪は言った。

「あなたは才能がある。あなたと仕事がしたいんです。」

「何ができるんですか？うちにはお抱えの作曲家ジヨロメキスがい
ますし、演出家演技指導すべていますよ。」

「だが、それを監督するのは愛さんですよ。そう。作っているのは
愛さんです。だからその作るお手伝いをしたいというか…」

「具体的に？」

「あなたの作る方向性を定める役ができればと。そうすれば楽しいか？」

「…冗談じゃない！なんて見ず知らずの人に…」

愛は言葉を止めた。そう、歪がただならぬ悪魔の笑みを浮かべていたのだ。歪は言う。

「さすが愛さん、賢いですね。こうなったら本当の事を言いましょう。実は政府から秘密裏に貴方に指令が下されたのです。」

「なんですと？」

「これから貴方は私を通して政府の言う通りに曲を書いてもらいます。貴方は国民に絶大な人気を持ちます。国民を動かすのにあなたが必要なのです。」

「…何、つまり、政府を称賛する歌を書けと。」

「そんなあからさまな事は要求しません。あなたの書きたいように、ただ少し変えて欲しい点がありますだけです。後でお話しますね。」

「…そんなのは、不正だ！」

「よく言った。あなたは愛に飢えた、愛飢男。私は不正に飢えた、歪飢男。不正と言われれば喜んでやりますよ。」

「そんなの…政府が言うか…お話じゃないのに…」

「お話は事実を写し出した存在です。政府に何の信頼があるのですか？あなたは…」

「しかし…断る事ができるのだろうか？」

「どうぞ。私は警察署長と仲が良いから、断ったら彼に一言言っておきますね。」

「うわあああ！」

なんたる政府の暴挙。愛は泣く泣くサインした。こんなのが許されてたまるか…！

去る時、彼はニヤリと笑いながら言った。

「私たちには共通点が多いですね…いいコンビになれそうです」

「で、どう作りやいーんですか。」

「まあまあ。単純な話ですよ。国民の共感を得た歌詞を作る。そしていろんな年代層にアピールする。」

「共感・・・？」

「例えば、わが国の女性は美しいだとか、働く女性を応援しますとか、僕たちはほんとは一人一人素晴らしい存在なんだ、とか、恋しちゃって幸せたくさんつかんじゃおう、とか。」

愛は驚いた。政府の要求なのに意外とマトモではないか。むしろ今後書く手助けになる。共感を得させる、とは、つまり愛飢男が愛を得るということだ。愛はにんまりしていった。

「すばらしいアイデアではないですか！ いままで気づかなかった・・・。ありがとう！ いやいやこれからも手助けしてかまいません！ 変なことといってすみませんね！」

歪もにこにこして握手し、愛の家を去った。

さて、垣・紅毛子かき・くけこは弟子入りするために愛の家の前にいたのだが、会話を聞いていた。そして出て行く歪が異常に歪んだ笑みを浮かべたため、これはどうもおかしいと察した。これはただ事ではない。

垣・紅毛子はその紅毛かき赤毛を振って愛のドアを叩いた。

「なんだ。」

「垣です。」

「ああ、赤毛の垣ちゃんね。どうぞどうぞ。」

「さっきの方は・・・。」

「ああ、僕のパートナーになった人だよ。」

「そうですか・・・。」

垣は疑念を抱きながら愛のレッスンをしに家に入った。

そしてしばらくして歪の指導のもと愛の新曲が出た。「幸せのあい
うえお」という歌だ。

♪ 幸せをつかもう。あ・い・う・えお
そうだー幸せ考えよう。あ・い・う・えお

そうだー本当のしあわせーそれはみんなが笑顔になるー。
にこにこ笑って、ほら。そうすれば輝くよー。

（サビ）

笑うために 金稼ごう そう 自分を磨こう ラブラブドッキューン
笑うために 愛稼ごう
だって 世界は 幸せなもの

その愛の卓越した演出テクによりこれも大ヒットした。そして国民
達は歌詞をかみ締めていた。

「やっぱりさー。幸せって愛だよねー」

「うん！僕達も幸せつかむためがんばろう！」

「なんて深い歌詞なんだろう！感動した！さすが愛飢男！」

「はっ、何言ってるんだし。ばかじゃね。こんなんで幸せといえる
なんてちゃんちゃらおかしいや。」

「何言ってるんだよ。」

「そつだよ世界は幸せなんだよ。君はただ悲観しているだけだ！」
「そつだそつだ！」

その会話を聞いて歪はにやりと微笑んだ。

「なあ、将来どうするー？」

垣紅毛子の周りで友達が話していた。

「将来？」

「なんとかなるっしょ。」

「そうだよ。世界は幸せだからねー。」

垣は言った。

「でも、何が起るかわからないからちよつとは考えた方が・・・

」

「はあ？何がおこるかって？お金かせいでー、素敵な男性とラブラブになつてー、結婚してー、幸せになる。それでいいじゃない。他に何が起るの？」

「だから稼げないかもしれないし、とんでもない変な人に狙われるかもしれないし・・・」

「ばかねえ垣は。そういう否定的なことを考えるから否定的なことがおきるんだよ。全ては幸せハッピーさ！！！！」

「でも・・・」

「ほら、垣も言おうよ。幸せの合言葉。せーの、あいうえお！」

「・・・」

垣はどうも違和感を感じずにはいられなかった。まるでこの前の大ヒット曲「幸せのあいうえお」を聞いてるような。最近愛先生もおかしくなった。なにが変なのかわからない・・・。どうしよう・・・ひょつとして私が間違ってるのではないか・・・とさえ彼女は思うようになってしまった。

だが、彼女は思った。こういう疑念がああ愛先生と絡んでいるなどの男―歪という名前だが―の作戦なのではないか。簡単に引つかかってはいけない・・・そう思い、彼女は家の近くの祖父の家に訪

ねた。

祖父は刺数千僧さし・すせ・そうという高名な僧侶であった。家族思いで孫からは刺じいちゃんと呼ばれていた。なんでも物知りで、困ったときにはいつも射じいは相談に乗ってくれた。

「刺じいちゃん。」

「おおおお。紅毛ちゃんか。髪の毛はずっと赤いのう。」
「地毛だからね。」

「そうじゃな。紅毛ちゃん、どうしたのじゃ？」

「ちよつと分からない事があって……。」

垣は一連の違和感を打ち明けた。

「……で、なんか変なの。なにが変なのかわからないけど……。」

「わしはわかった。だが言葉に出来なくて、苦しいのじゃろ？」

「うん……。」

「わしは、ちよつとコネがあつてな、いろんな話を聞いておる。政府の連中が何を企んでるか、その『幸せの』うんちゃらでわかった。」

「どういうこと？」

「簡単じゃ。政府は国民の頭を悪くさせようとしてるのじゃよ。」

「ええ？」

「国民的アイドルをつかつて、『幸せ』という言葉をつかつて、国民の関心を、言ってしまうえば世俗的なほうに向けさせているのじゃよ。お金とか自分とか愛とか。まるでそこしか世界がないようになそうすることで、たとえば学問とか政治とかそういう広い世界に関心を持たせないようにしているのじゃよ。」

「ええ？」

「現に紅毛ちゃんの周りもそうなってるではないじゃろか。幸せだ

からそれでいい、何も余計な事をする必要はない、おとなしく社会に従順な存在。政府が求める国民と言うのはそういう存在じゃよ。現に否定をいやがっている。否定を嫌がるという事は現状維持が第一なのじゃよ。政府が何か法案を発表しても、自分が『幸せ』だから何も考えずに受け入れる。とな。まあこの考えに大きな根拠はないが、政府が関わってるということはそれしか考えられないじゃろ。

「

「ということは、おじいちゃん……もしかして皆が浮かれてる間に政府が何かしようとしてるの……？」

「まあ考えられる話じゃな。」

4

伝藤太刀つてどう・たちという男がいた。彼は立派な屋敷に住んでいた。彼は自室で座って新聞を読みながら、何かを待っていた。

やがて、りりりりとアンティークの黒電話が鳴り、伝藤は電話を取った。

「おはようございます。」

「おはよう」

「おはよう」

何人もの人々が電話に出ていた。電話会議だったのだ。人々は話始めた。

「盗聴チェック、確認しました。大丈夫です。」

「よろしい…N計画、順調に進んでいるようだな。」

「そうだ。最初の布石である“国民低脳化計画”…十分に上手くいつている。」

「テレビ局をちょっとまあ脅かして、うるさいニュースや時事の番組を減らしといた。代わりに、国民が楽しむバラエティ番組をたくさん入れるよう言ったら、おやまあ犬のように従いおった。」

「愚民どもは、もはやファッションや恋愛や自分を磨く事しか興味を持たん。我々の行動など殆ど気づかないであろう。」

「だが知識人と名乗る奴が何か言い出すかもしれん。」

「そういうやつは罪被せて社会的に殺してしまうのが一番だ。エリートにはエリートなりに愚民になって貰わないと我々には困るんだよ。」

「だよな。」

*

垣紅毛子は、祖父の話を聞いて以来、周りの様子に注意を払った。陰謀が渦巻く世の中である。些細な変化にも注目した。

まず、本屋が様変わりした。雑誌はそれこそ時事を扱った雑誌は消え、ファッション系で溢れ返った。「楽しければなんでもいい」「自分が幸せなら世界も幸せ」魔法の方程式」という、あからさまな樂觀を勧める本がベストセラーになっていた。

垣はそれらに対する反論を頭の中で構築していた。なんとかなる、というのはなつらい現実を見ても受け入れ、悲観しない意味で用いられるべきで、始めからつらい事を否定して「なんとかなる」と断定するのは、樂觀の捏造だ、と。

一番彼女にとって違和感を感じたのは、服についてである。彼女は独特のファッションで、メルヘンチックなワンピースをいつも着こなしていた。だが友達と言う。

「その格好変だよー」

「いいじゃない。私、これが好きだもの。」

垣は言い返した。だが友達と言う。

「ねえその格好やめてよ。変だよ。」

「あなたたちの格好だって言ってしまうえば変よ。海ガールなんて。はっ、とその友達、そして周りにいる、青い全身タイツ来た人々が振り返った。

「これは流行りよ。何が変なの？」

「それが流行ってる事。」

「流行りだからいいじゃん。流行ってるから普通なのよ。紅毛ちゃんは流行りから否定して何をしたいの？」

垣紅毛子は黙った。見えない圧力を友達の裏に感じた。自分以外の人物に染み渡る巨大な“流行”の力に、到底抗えるはずがない。

「とにかく…別にいいじゃない。」

と言い捨てて垣は去った。徐々に強まっている…そんな気がした。

＊

「…国民らは徐々に低レベル化を進めている。そして、我々は経済危機を起こす。」

「安全に経済危機を起こすにはどうすればいいか。」

「簡単だ。貿易を制限すればよい。」

「我が国では綿の輸入が大多数お隣のあの国に輸入している。」

「それを制限すればよい。」

「簡単だ。我々で輸入を制限し、相手国が制限したかのように伝えればよい。」

「我が国とあの国は度々いがみ合った。敵にするには簡単だ。」

「敵にすればだれも冷静に事を見まい。」

「相手国が制限するきっかけは？」

「うーん、どうしよう…そうだ。船を二台出して海上でぶっつけよう。船にはそれぞれ我が国の船と相手国の船の役をやってもらう。」

で相手国が激怒して綿の輸入を制限する報道をする、と…」

「そうなった時に、」計画だ。伝藤くん。」

「はい、歪議長。」

電話会議にて伝藤は言った。歪飢男議長は言う。

「頼んだぞ。」

電話会議は終わった。

5

政府の計画通り、船の衝突事故が起きた。計画通り、相手が某国の船で、トラブルになり、綿の輸入が大幅に減ったと報道された。はたして本当なのか。垣は疑念に思うが、周りは「某国まじクソ」「某国死ねよ」「某国は野蛮人しかないから仕方ない」と口々に言う。野蛮人と定義付けるのは簡単だが、はたして、そんな簡単な話なのか。だが否定するだけの根拠はない。

*

「作戦は成功した。」
「次は」計画だ。」
「伝藤太刀の出番だな。」
「だが、その前に演出を加えよう。」
「愛飢男にふたたび頑張ってもらおうのだ。」

*

愛飢男の新曲が出た。「チョウチヨ」である。閉鎖された芋虫の社会から自由に可憐に羽ばたこうとする女性を応援する歌だと言った。しかしその意味深な歌詞に物議を醸し出した。

♪ チョウチヨ、チョウチヨ、自由にとまれ
ぼくらはあなたを 応援します
某国なんかに負けず 頑張れ頑張れ
野蛮な国から解放しておくれ

この歌詞は別に何の物議をなく国民に受け入れられていた。だが後のこの歌詞が議論を呼んだのだ。

♪ 預言をします 解放してくれる

偉大な方の名 たちつてと！

ほどなくして伝藤太刀という政治家が突然テレビに現れ、支持を集め始めた。彼は差別発言などの暴言が非常に多く、また番組中に突然小さな理由で怒り出したりと、奇行が多かったのだが、なぜか支持を集めていた。というのもそれらの奇行は全て伝藤の演出で、彼の演出テクニクの上手さで、マスコミのフォロ―により、逆に「かつこいい」と好評価なのだ。

さらに、愛飢男の歌「チョウチヨ」に関連性があるに相違ない、という話も持ち上がった。前述したように歌には預言が記され、野蛮な国から救う者の名「たちつてと」がかかれていた。そして伝藤太刀。姓名入れ替えると太刀伝藤：たちつてと！

彼こそが巨悪を暴く救い主だと、国民らは信じ始めた。

垣紅毛子は信じなかった。当然である。どう見てもあからさまに政府の謀略だ。しかし垣がそう叫んでも、周りに聞き入れる者はいない。

「伝藤さんは救い主じゃないわ！」

「証明してみろ。」

「伝藤さんは救い主じゃないわ！」

「そんな話は聞きたくない。」

「伝藤さんは救い主じゃないわ！」

「だからなんなの？」

「伝藤さんは救い主じゃないわ！」

「それは君の偏見だね。」

「伝藤さんは救い主じゃないわ！」

「僕もそう思う。」

「え…？」

始めて同意してくれる人がいた。クラスメートの刃結男^{やいゆえお}だ。

「刃くん…」

「あれはあからさまに政府の圧力がかかっている。だがみんな、もはやその違和感に気付かないでひたすら盲信している。洗脳だよ。」

「そうなの…」

「だから、紅毛ちゃん、さっきみたいに外部にいつちゃだめだよ。

誰が聞いているか分からない。学生と言えども、政府のスパイかもしれない…」

「…！」

なんとなく嫌な予感がした。まさか、あいつが…。根拠はないが、

「伝藤さんは救い主じゃないわ」と伝えた人の中に彼はいた。カンが正しければ彼は怪しい…彼の名前は学である。

6

「もともと、できないやつはできないんだよ。弱者を支援する理由などない！」

「某国は犯罪者しかない国だから」

「行政は机上の理論でしか動かないクソどもだ。」

数々の暴言を吐く伝藤だが、彼は何故か人気だ。何故なら某国は、我が国の経済を苦しめる悪者で、そいつから救う存在と信じられていたからだ。おまけに彼の暴言は「キャラクター」として許容されていた。国民は、彼の暴言がある種うわべの物だとは無意識では気づいていたが、それを彼が真実に突き進むが故の暴言だと錯覚していた。ただの演出に過ぎないのに。

テレビでのそういった活躍を見て学は言った。

「計画通り、伝藤さん頑張ってるね。父さん。」

「ああ、むしろ遊んでいるな。」

父の歪顔男は言った。歪学は言った。

「お父さん」

「なんだ？不正を学ぶ我が息子、歪学よ。」

「私のクラスに、反逆者がいます。垣紅毛子です。」

「なに？」

「伝藤さんが救世主ではない、政府の陰謀だとあちこちに触れ回ってます。幸い誰も信じてませんが。」

「しかし手を打たねば……」

「ここに、写真があります。」

「…なんの写真だ？」

「僕の盗撮写真です。」

「なに、学、貴様……」

「やだなあ、父さん、僕の盗撮の腕前を見てくださいよ。」

歪飢男は写真を見た。まるで映画の一シーンのように、盗撮とは思えない美しすぎる構図とポーズ。飢男は息子の腕前に感心した。

「さすが我が息子！スナップ写真！立派な写真家になれるぞ！」

「いやあ父さん照れるなあ。でも写真ちゃんと見て。」

歪飢男は写真をしっかり見た。赤毛にメルヘンのような服装…歪はハッとした。

「こいつは…最初に愛飢男と打ち合わせした時に愛の家の前にいたやつだ！会話を聞かれたのだな！畜生！」

「どうしましょう。」

「逮捕だ。」

「だめ。」

「なぜだ。」

「紅毛ちゃんは、このように可愛らしい服装をしてるけど、変に根性のある人。大体海ガールブームに反抗してるし。逮捕ごときで凹んだりはきつとしない。」

「では…」

「簡単です。紅毛ちゃんを殺せばいいのです。」

「…！」

「お父さん…どうしたんです？」

「いや…我が息子ながら…びっくりした…そうか、それが一番良いわな。」

*

愛飢男は未だに愛に飢えていた。と言うか最近になって愛を感じなくなつた。果てしない虚無感。人々は自分が好きだから自分を買っている、というより、それをするのが当たり前だから自分を買っている、というように思う。こんなのでは買われても仕方ない。いっそ寂しくなる。なぜだ、なぜこうなつた。

あいつのせいだ。あいうえおに対するわぬうゑを…歪飢男。あいつ

との呪われた関係を切りたい…だができない。一度繋いでしまった関係から逃れるのは非常に困難だ。最初は彼は、普通のアドバイスをしただけなのに、段々変な要求をするようになった。あいうえおを崇める歌のほずが、ただの愛を歌った歌、やがてたちつてとを崇める歌になった。伝藤太刀め。ちくしょう…だが始めた物は戻せない。

*

授業。刃結男は窓際の席にいた。対角線上にいる紅毛子は先生の話聞いていた。刃は、窓の外を眺めていた。ふと校庭に不審な人物を発見した。スーツ姿。よく見るとバッジをつけている。それは…

「紅毛子！」

突然刃は立ち上がって、垣の元に向かい、垣の手を引いて教室を出た。先生は一瞬黙って、「なんでしょうね」とせせら笑いながら授業を再開し、クラスの人々は、ひそひそと噂した。廊下で垣は訊ねた。

「刃くん、なんなの？」

「秘密警察だ！逃げないと殺される！」

#7

歪飢男はにやにやと笑っていた。何と面白い状況だ、何と楽しい状況だ。彼は歌い出した。

*

♪ 僕が右向けと言えば
みんな右を向くんだね
僕が死ねと言えば
みんな迷わず死ぬのだね

嗚呼

すっちらつかすっちらつかすっちらつかほい

僕はみんなの意思になる
みんなは僕の意味になる
意識の集合神を生む
故に僕は神様だ

嗚呼

すっちらつかすっちらつかすっちらつかほい

悪魔も僕にこんにちは
地獄の門が開いたよ
王座に僕は座ります
冥界の、歪飢王！

*

げらげらと歪は笑いながら、自分は愛飢男のように歌の才能がある
と一人酔っていた。
さてと、事は全て計画通りに進んでいる。今、丁度、奴等が逃げ
ている時だな。

*

二人の殺し屋、ナニヌ・ネンノンと破妃・怖片穂^{はひ・ふへほ}は授業中の教室に
押し入った。先生が驚く中、ネンノンは言った。

「特殊警察のネンノンだ。垣紅毛子は、どこに、いるかね。」

先生はわなわな震えた。ネンノンと名乗る男性は背の高い金髪の異
国人、もう一方の女性―破妃怖片穂―は背は小さく人形みたいな顔
立ちで穏やかな雰囲気だけに不気味である。先生は言った。

「に…逃げました…」

「逃げちゃったの？」

破妃は穏やかに訊ねた。

「…はい…」

「どこにいるか知らない？」

「…知りません…」

「本当に、知らないの？」

だんだん破妃の眼光が鋭くなってきたので恐ろしくなって先生は言
った。

「知りません知りません知りません！」

「本当に知らないみたいね…」

「そうだな…」

先生は言った。

「ただ、男子生徒刃結男と逃げました！」

「そうか…情報ありがとう…授業の邪魔して失礼した。」

ネンノンはそう言い、二人の殺し屋は去った。

*

「さあ、どう学校を出るか…たぶん昇降口からは逃げられない…」
理科室で刃は言った。垣は言った。

「2階まで逃げて、窓から飛び降りる？」

「それしかないね…しかし、ここは3階だ。廊下を歩かねば…」

「頑張りましょう。」

「そうだな…」

二人は廊下に出ようと理科室の出口扉を開いた。
扉の向こうに破妃がいた。

「きゃあ！」

「あ、二人ともこんにちは。」

にこつと笑って破妃は銃を取り出した。

「伏せろ！」

二人が伏せた時、消音機付き銃から、スカッという擦れた音と共に弾丸が飛び出した。幸い当たらなかったが、顕微鏡が一台壊れた。

「あ、失敗しちゃったあ。仕方ないわね。」

破妃は弾を取り出し、装填しようとした時、二人は破妃に突進した。咄嗟に破妃は撃った。弾丸は刃の頬をかすったが、それに負けず、刃は破妃に突進した。押し倒された破妃を乗り越えて、二人は逃げた。

「降りよう！」

そう刃は叫んで二人は階段を降りた。もはや飛び降りるなんてもつての外、隙をつかれるからまずいと、彼らはひたすら下に疾走し、玄関にたどり着いたが…

「きゃあ！」

垣は悲鳴を上げた。ネンノンがいたのだ。ネンノンはチェーンソーを持って襲いかかった。

刃は靴を脱いだ。そして靴をネンノンめがけて投げつけた。靴はネンノンの目に命中し、ネンノンは「ああおっ」と叫んで怯んだ。その隙に二人は逃げ出した。

「逃げられちゃったわね。」

破妃は言った。

「そうだな…」

「仕方ないわ。このツケは誰が払う？」

「誰がつて…？」

バアン！銃声が鳴り響き、ネンノンは足を撃たれた。よろめきながらネンノンは言った。

「…何を…」

「あなたは二人の被害者になってもらいます。」

「被害…者…？」

「二人に殺された事にします。そうすれば二人は異常犯罪者として国民の敵になります。」

「何を！」

「今回の作戦指揮はあなたです。作戦に失敗したのはあなたの責任です。ですから責任は取らせてもらいましょうか。」

破妃はそう言いながら銃を構えた。にこりと彼女は笑った。人形のような華奢な可愛らしい風貌だが目の光ばかりは燃えるように光っている。

「やめろおおお」

「はあ、はあ…」

「なんとか…逃げ切れたわ…」

「どうなったんだろう、学校…」

「銃とかあったからね。ニュースに載ってるかなあ。」

「見てみようか。でも、どうやって…」

「ワンセグがあるじゃない。」

垣紅毛子はそう言って携帯電話を取り出し、ワンセグでテレビ局と通信して見た。

「…ニュースです。○×学校で発砲が起き、これにより無職のナニ又・ネンノンさんが死亡。目撃した女性によると、学校の生徒、垣紅毛子と、刃結男が銃でネンノンさんを撃って逃げた模様。警察は二人を捜査している所です。」

二人は見合わせた。どういう事だ、私たちは銃すら持っていない…なんでこんな事に…誰が目撃した…

しかし二人は冷静に考えた。銃を持っているのはあの人形のような殺し屋しかいない。目撃した女性…それは彼女ではないか。

二人は心底彼女―破妃―に怯えた。仲間のネンノンすらも殺して自分達を貶める…いったいどういう思考なのか…

二人は他のニュースを見漁った。特ダネらしく、どこの番組も二人について取り上げていた。

「垣の友人の無名面・真実（むめも、まみ）『あんな子だったなんて…普段は大人しい個性的な子だったのに…』」

「犯罪心理専門家『流行に反抗して、周囲から疎外していくうちに鬱屈が溜まったのでしょう。それで抑圧のはけ口を求めて』」

「はたして彼女は普通の女の子なのだろうか。あの髪の毛を見なさい。まるで異国人のようだ。」

「某国と我が国は、船衝突事件以来、緊張状態が続いている。」
「伝藤『垣、ていうやつは某国人か？国を攪乱するスパイだな。』」

垣はあまりの事に声も出なかった。ひどい…皆よくも堂々と嘘が言えるものね…。許せない…。絶対に、許せぬ…。

だが、突然刃結男が憤って、垣をつかみ、怒鳴った。

「やい、垣！お前、スパイなのか！」

垣は慌てて答えた。

「違うわ！違う！」

「嘘をつくな！だましたな！」

刃の目はあらぬ方向を見ていた。垣は叫んだ

「落ち着いて刃くん…目を覚まして！あなた私と幼馴染みでしょ！」

ふ、と刃は正気に帰り、へなへなと崩れた。

「…ごめん…僕…何をしてたんだ…」

「大丈夫？」

「マスコミの洗脳がこれほど強いとは…抜けようと頑張ったが、どうしても頭に入ってきてきちゃうんだ…無意識のどこかでマスコミの情報を受け入れてる…不可抗力だ…君のような強さが欲しい…」

「私…でも、だから狙われてるのよ。」

「狙われてようがいいじゃないか。君には他にはない自分のエネルギーがある…僕には、足りないんだやはり…」

「ちよつと…自信を持つのよ。さあ。」

「…そう、だね…こういう時は幸せの呪文、あいうえお…」

ふと、垣は目を見開いて固まった。刃は不安に思って訊ねた。

「…どうしたの？」

「…それよ！」

「それ？」

「愛飢男！」

「愛飢男？」

「私、あの人に師事してたの。」

「で？」

「彼をこっちの味方にすれば…」

「政府にとっては痛手。」

「行こう！」

こつ、こつ、こつ。

破妃怖辺穂は、アスファルトの上を歩いていた。体は小さいが、中に抱えるものは異様だ。無表情で、楼人形のように皺がなく、しかし瞳は異様に静かに輝いている。彼女にすれ違った人々はなぜか背筋に寒気が走るのだ。

蚊が飛んできた。蚊は彼女の腕に止まり、血を吸い始めた。彼女は腕をゆっくり見た。蚊が血を吸い終わって飛んでいくまで見続けた。飛んでいく蚊をみて彼女は「かわいいわね」といいながら微笑んだ。彼女は無用な殺生はしない。あくまで無用な場合。

ふと、目の端に何か動くのが見えた。赤毛。あれは。彼女はさっと銃を一瞬で構えて撃った。

「見つかった！」

「早く逃げろ！」

カッと顔がひきつり、破妃は追いかけ始めた。

再び逃げ続ける二人。後ろからは小ぶりの破妃が追いかけてくる。破妃は真っ直ぐ、垣紅毛子に狙いを定めたが、撃とうと言う時に限ってさつと横に逃げる。だからなかなか撃てない。そして二人は逃げる。やがて二人は人込みに逃げた。さすがに人前で殺人はできない。もしかしたら無用な殺生をしてしまうかもしれない、そう思い破妃は銃をしまった。

人込みの中、二人は話し合った。刃結男は言った。

「どうする…？」

「愛先生の所に行くしかないじゃない。」

「ここはどこだろう。」

「知ってるわ。愛先生の住んでる町。ここの外れに先生の家がある。」

「じゃあ、行こう…」

だがその時、ひそひそと噂話が。

「おい…あいつは…」

「そうだ、あんな赤毛はあいつしかいない…」

「学校で殺した…」

「学生でありながら某国人のスパイ…」

垣は怖くなって、逃げ出そうとしたが、噂は広まっていった。

「本当か？」

「本当だ。」

「あんな顔してるが、中身は汚い某国人だ。」

「攘夷攘夷！」

そして、大衆の一人が垣に言った。

「お前だろ！お前が、垣紅毛子だな。」

「いいえ！違います！」

「嘘をつけ！写真とそっくりだろ？」

「いいえ！」

「なんだ、垣紅毛子じゃないのか…じゃあ某国での本名があるんだな。だろ？」

「私はそんなじゃありません！」

「じゃあ証明してみろ…黄身が四を唄ってみろよ！」

垣は助けを求めるように刃を見た。刃は目が濁り、顔がひきつり始めた。マスコミの洗脳工作で無意識に植え付けられた思考が、彼に怒りをもたらしていた。彼は垣を憎むようになったが、それに気づき頭を振り払った。

「刃くん…」

「ごめん！」

刃は逃げ出した。垣は啞然とした。

そして大衆は集団心理により一斉に騒いだ。

「ほらほら、頼りの相棒は逃げたぞ」

「はやく唄え、黄身が四。」

「うったーえ、うったーえ」

銃声。皆が静まり返った。

「みんな、静かにして下さい。私は特殊警察の破妃怖辺穂です。ちよつと紅毛ちゃんに用があるの。ちよつとみんな紅毛ちゃんを抑えてね。」

みんなが一斉にわつと垣を押さえ、破妃はゆっくり垣に近づいた。垣は叫んだ。

「あなたが殺したのよ！あなたがネンノンさんを！」

「ふふふ、そういう問題じゃないわ。あなたは国を愛する者の敵。死んでもらいます。」

そして破妃は銃をかまえた。

だがその時、破妃の右で気配がした。そう、何者かが破妃に物を投

げたのだ。破妃は投げた方を撃つたが、それに気をとられた隙に左の方から毒矢が飛んだ。命中した破妃は目を見開いて、そのまま倒れた。

「安心せい。眠り薬じゃ。」

左の方からなんと、垣紅毛子の祖父、刺素世僧が吹き矢を持って現れた。

「刺おじいちゃん！」

周囲はどよめいた。

「某国のスパイだ！」

「こやつが黒幕だ！」

刺は叫んだ。

「皆の衆！よく聞け！垣は敵ではない、被害者じゃ！彼女は政府に確かに刃向かったが、それは政府が間違っているからだ。政府らは何らかの目的で、君たちを操りやすいようにしたのだ！」

「証明はない！」

「僕が証明だ！」

刺の背後から叫び声が聞こえた。愛飢男が立っていたのだ。垣は驚いた。

愛は言った。

「僕は…皆に愛されるために、これまでの人生を積み重ねたが、今、皆の愛を棄てる覚悟で言う！僕は政府の言いなりになっていた！」

周囲はどよめいた。

「たちつてとの預言も政府の茶番だ！あれは伝藤氏を独裁者にするための嘘だ！皆！心から言う！すみませんでした！」

しばらく沈黙が続き、しばらくして拍手がば、ち、ぱちぱちと轟いた。皆は愛飢男を許したのだ。

「ありがとう！ありがとう！皆のために、僕の原点、『あいっえお

の愛の歌』を歌います！♪“あ”なたがすきよ、“い”までもすきよ、“う”しろに……”

ふと、垣は、刃を発見した。肩を撃たれてよろめきながら歩いている彼を見て、最初に破妃に物を投げたのは彼だと垣は察した。

刺僧は言った。

「刃くんはな、お前を助けるために頑張ったのじゃ。愛がとうとう精神的に行き詰まってわしと相談している所に刃は現れ、君の危機を知らせた。そこで、わしらは助けにいったんじゃ。」

「そうなの…刃くん…ありがとう…」

「いいよ。」

刃は言った。

しばらくして歓声が聞こえ、愛の叫び声が聞こえた。

「ありがとう！皆の愛を感じることができて僕は幸せです！これから僕は、愛飢男、じゃなくて愛植男になります！みんなに愛を植えたいのです！」

刺は言った。

「さ、刃くんは病院に行った方がいいじゃろ。だがわしらには残された仕事がある。」

「どんな？」

垣が言うと、歌を終えた愛が現れて言った。

「考えてみればすべてはあいつと僕が原因だ。歪め…やつと戦わなくては。」

「それでいいのかね。」

「償いのために、僕は彼と戦います。今夜に。」

四人の間に沈黙が来た。夕陽があかあかと四人を照らし、半身が影で真っ暗だ。刺は言った。

「今夜は快晴で満月らしいな。そうか月夜に決闘か。」
「そう、あの月が満ちる時。」
愛植男は言った。

#10 完結

「お父さん。」

歪学が、歪飢男に言った。

「なんだ、学。」

「愛飢男が裏切りました。」

「なに？」

「二人にしてやられました……。破妃も拘束されています。」

「畜生……。やつめ、説き伏せられたのだな。」

「あと……。それに関することなのですが……。愛から手紙が・

・・・」

「なに？」

学に渡されて、歪は手紙を読んだ。

「歪飢男へ。」

僕は、あなたから離れなくなりました。

あなたの考えから対立しました。

ですが、まだ迷いがあります。

あなたと決闘がしたいのです。

今夜7時、上野公園の噴水前で、日本刀を持って待ってます。愛植男」

そうか……。とうとうこうなったか。仕方ない。歪は、ラリール・レ・ニール主演の「ゲット・ファーザー」の映画が移っているテレビを消して、個室に向かった。個室の奥には、歪家代々伝わる刀ころし丸が飾られてあった。刀を抜いた。刀は夕陽で血の色に光っていた。そうだ。今夜が決闘のとき。

そして、午後7時。上野公園。噴水の前は広場である。そこにステ
ージのような段差があり、そこに愛は愛家代々伝わるいかし丸とい
う刀を持って待っていた。

やがて、左の方から揉め事が聞こえた。交番の警察と歪が言い合っ
ている。

「ちよっと、それなんですか・・・？」

「なんでもない。」

「刀じゃないですか！？銃刀法違反で・・・」

「ちっ、うるせえんだよ。おりやつ。」

「わあああああ。」

しばらくして歪が現れた。愛は言った。

「とうとう、きたな。」

「ああ・・・裏切りものめ。国民の愛どころか、僕の愛も裏切る
のか。」

「僕の愛だと？僕の愛植男だと？僕は貴方の所有物じゃない！」

「なぬ？お前は僕の愛だ！僕のものだ！」

垣ははたから見て、まるで異常な痴話げんかみたいだとゾツとした。

「なんのために国民をロボットにしたのだ！？」

「お菓子の国が作りたかったんだ！」

信じられない理由に一同驚愕した。

「は・・・？」

「お菓子につつまれた国にするために国民を操りやすいようにした
んだ！」

「そんなことは許せない！こんにやる！」

「がああああ」

両者は刀を持って走り、刀を振るった。カキーンという音と共に刀

と刀が触れ合った。あまりにキレイに響いたためその音が両者の耳を突いて、「うわ!」と叫びながら倒れた。

だが二人とも起き上がった。そして刀をふるって、叫んだ。

「うわああああ」

カキツカキツカキツ。両者の剣は触れ合うばかりでなかなか勝負はつかない。見物人はどんどん増えてくる。垣は大丈夫なのかしらと見守った。

だがその時、歪の強い刀さばきで愛の刀が勢いよく手から離れてしまった。

「わああ!!!!!」

たちまち歪に組み伏せられ刀が向けられた。歪は言った。

「わかったか?裏切り者はこういう目にあうのだ、ふははははははは」

その時、どどどどと足音が一齐に聞こえた。なんだろうと歪が見ると、なんと大量の警察が。上野公園の交番にいた警察が必死に通報したのだ。

「刀を持っている!」

「銃刀法違反と公務執行妨害と傷害罪の現行犯で逮捕する!」

たちまち歪は逮捕され、警察に連れられていった。

なんだかあっさり終わってしまったって妙な違和感すら感じられたが、これでひとまず平和になったと愛と垣と刺はため息をついた。月は輝いている。

== THE END ==

主要登場人物（五十音順）と後日談。

愛飢男^{あい・うえお}・・・本編の主人公。愛に飢えて大ヒットシンガーになったがそれ故に政府に操られる事となつてしまった。だが改心し、愛の伝道師として愛植男として生きる事を決意する。

垣紅毛子^{かき・くけこ}・・・本編のヒロイン。メルヘン的な服装を愛する赤毛の女の子。強い意志をもつ。

刺素世僧（さし・すせ僧）・・・垣の祖父。知恵に満ちている。

伝籐太刀^{つてとう・たち}・・・数々の失言を言いながら権力者として絶大な人気を持った男だが、この後マスコミが方向転換してバッシングされてから悪夢の日々を過ごした。

ナニヌ・ネンノン・・・殺し屋。ヘマをしてしまい破妃に処刑された。

破妃怖辺穂^{はひ・ふへほ}・・・殺し屋。見た目と思想と仕事に恐ろしいギャップが生じている恐ろしい人。この後彼女も逮捕された。

無名面真実^{むめも・まみ}・・・垣の友達。この後仲を取り戻した。

刃結男^{やい・ゆえよ}・・・退院して以降、垣と親しくなった。この後の展開が楽しみである。

ラリール・レ・ニーロ・・・大ヒット俳優。

歪飢男^{わぬ・うゑを}・・・悪者。学と言う名前の息子がいる。お菓子之国を作る

ために用意周到に国民を低脳化させた人。この後彼も伝籐と共に悪夢の日々を過ごした。

「とまあ五十音字の人々がこのシナリオにいたわけですね。」

「そうだ。だが、一人忘れているであろう。皆気づいてないが。」

「そうですね（笑）あなたですよね。」

学がそう言つと、にやり、とその男は笑った。その男は無^んという名前であつた。彼は、知る人ぞ知る、ある地下の建物に住んでいたのだ。彼は遊び好きであつた。シナリオを作つてその通りに動くかどうかを楽しんでいたのだ。実は彼は多くの人に化けていた。先ほどの上野公園の警察もそうだし、愛飢男の振付家でもあつたし、国民の中にいて国民を扇動したり、N計画などを発案したり、実は垣や刃や学の学校の教師をしていて、学の変わりに垣のスナップ写真を撮ったり・・・

「よし、次はどんなシナリオを考えようかな。」

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4691o/>

あの月が満ちる時

2010年11月9日05時17分発行